

DX時代における「江の島」の魅力発信

新型コロナウイルスの感染拡大により、特に観光地は多大なる経済的被害を受けている。全国的な観光地である江の島も例外ではなく、藤沢市の調査によると大型連休中に江の島を訪れた人は、新型コロナウイルス感染拡大前の2019年に比べて6割近く減少したことが報告されている。

神奈川新聞本紙（5月16日付）に掲載された「週末さまよう人」と題した記事では、神奈川県下の観光地の現状として、江の島をはじめ大山や箱根の様子を報じている。記事中では、江の島を訪れた人へのインタビューとして、「つい来てしまった」とのコメントが掲載されている。このことからわかる通り、コロナ禍においても観光地を訪れたいという意向を持ちつつも、個人の心理的には“後ろめたさ”や“ネガティブ”なイメージを有している方が多い現状が伺える。

江ノ島は、地理的な要因から「密になる場所の定番」として報じられることが多い中で、前述の通り大幅な観光客の減少に伴い、地元の飲食や土産物店をはじめ大きな経済的打撃を受けている。

このような状況に対して、藤沢市もさまざまな対策を打ち出している。来訪者が「3密」を回避できるようにするために、江の島内の観光施設や飲食店の混雑状況をリアルタイムで知らせる「エノマップ」の導入や、家に居ながらにしてVR（仮想現実）空間で江の島観光を疑似体験できるという「DX ENOTOWN」の運用も開始した。DX ENOTOWNは、新江ノ島水族館や江の島岩屋などの5施設を自身のアバターが見学できるというもので、観光ガイドが施設の魅力や歴史について講義もしてくれる。

リアルな観光が制限されている中、各種オンライン施策等を通じて、江ノ島に対してポジティブな印象を与えることが可能になる、このような取り組みがいずれ大きく花開く時が来る。その時に向けて「江の島」の魅力を発信し続けていくことが重要であろう。

神奈川新聞社 東京支社営業部長 黒瀧 應司

